

紫式部の「身」と「心」の表現

中原 裕子

紫式部はその日記において次のような自らの宮中生活への思いを書きつけている(1)。

師走の二十九日にまゐる。はじめてまゐりしも今宵のことぞかし。いみじくも夢路にまどはれしかなと思ひ出づれば、こよなくたち馴れにけるも、うとましの身のほどやおぼゆ。

夜いたうふけにけり。御物忌におはしましければ、御前にもまゐらず、心ぼそくてうち臥したるに、前なる人々の、「内裏わたりはなほけはひことなり。里にては、いまは寝なましものを。さもいざとき沓のしげさかな」と、いろめかしくいゐたるを聞く。

年くれてわが世ふけゆく風の音に心のうちのすさまじきかな
とぞひとりごたれし。

『紫式部日記』

十二月の二十九日に、実家から宮中に参上した。その際に、ふと作者は始めて宮中に参上した日もちようど今宵のことであつたと回想する。全くあの時は夢の中をさまよい歩いているような心地であつたことよと當時を思うにつけても、今ではすっかり宮仕えに慣れきってしまったっている作者の心境の変化を「うとましの身のほどや」と自ら評価している。

夜がたいそう更けてしまった。中宮は物忌にこもってしまったているため、御前にも参らずに、独りもの寂しい気持ちで臥せている。すると、一緒にいた若い女房達が、局を訪れるらしい男達の靴音に心を弾ませている。老成した作者には彼女達とともに夜を楽しむことができない。ただそれらの女房達の様子を聞きつけて、ひとり眩きをもらすほかないのである。

若い女房達との心の隔たりから浮き彫りにされた「心のうちのすさまじき」という作者の心情は、「うとまき身のほど」と相まって、恐ろしいほどの孤独がそこに描きだされている。現状の「私」は本質的な「私」でないはずである。だがやがて新参当初の心境に比べ、いつの間にかその現状に慣れてしまった自分がある。「はづかし」という負の感情がなくなった代わりに、刺激的な宮中生活を樂しむ感覚も薄れている作者には、若い女房達と騒ぐこともできない。二重の意味で背反している孤独な自己の在り様、姿を「心のすさまじき」という剥き出しの表現で示しながら、自身の「身」を厳しく見つめている作者の姿が見えてくるようである。

一、『紫式部集』歌二首の解釈について

紫式部は自らの「身」と「心」のあり様を常に冷静な目で分析し、内省を深めていった女性であつた。それらは『紫式部集』において、精神の複雑なあり方を考えようとするかのように独詠歌を残している(2)。

身を思はずなりと嘆くことの、やうやうなのめに、ひたぶ
のさまなるを思ひける

数ならぬ心に身をばまかせねど身にしがふは心なりけり
心だにいかなる身にかかなふら思ひ知れども思ひ知られず

紫式部の歌二首については様々な解釈がある。「数ならぬ心」について森本元子氏は「心に身をまかせることを積極的に否定」しているとされており(3)、堀川昇氏がそれをふまえた上で、「さまざまに揺れ動き、葛藤する心から生じてくる否定的な心、易きにつこうとするような心を用いるのではないか」と解釈されている(4)。

対して、山本淳子氏は「数ならぬ」の「数」は「人数」である。「人数」という概念は、世間のまなざしでものの社会的立場を判断するものである。対比する何かがあり、それとの関係において判断されるので、あるものの個別的・本質的な善悪を言う訳ではない」とされている(5)。ここでの「心」は作者の精神そのものを表わしているもので、前者の説はやはり無理があるようである。この句は通常なら「数ならぬ身」と多く詠まれるところをあえて「心」としたと考えられる。これについて『全評釈』では「宮廷高貴の方から見れば、取るに足らぬ「心」にすぎないものであろうが、その心こそは私自身のものであるはずなのに、という意識がその基体にある」とされており(6)、後藤祥子氏は「卑下の裏に、抗しがたい権力への抗議がひそむ」とされている(7)。清水好子氏もまた「宮仕えの話がぼつぽつ出始めて、権門の抗しがたい力を感じつつあつたのだらうか(8)」と指摘されている。詞書で「身を思はずなりと嘆くことの、やうやうなのめに、ひたぶのさまなるを思ひける」という激しい葛藤から生まれた歌であるから、「数ならぬ」という卑下をそのままの意味にとってしまったてはいけないうらう。「身」を嘆く

ことは、その「身」が自分にはそぐわないという「心」の不満を表わす。「身」を嘆くほどの「心」を持つていない、そんな「数ならぬ身」とそう変わりはない私の心、というような自虐ともとれる卑下である。

「身をばまかせねど」の意味には「まかせられない」という不可能のニュアンスをもつと山本氏は指摘される(9)。数にも入らない私の心のままに、身をまかせて自由にできようもないが、逆に境遇に押し流されている身についていつてしまっているのは心のほうであるとし、その「心」でさえ、と次の歌に続く。

清水氏は次のように述べられる(10)。

「身にしがふは心なりけり」と、いつとき平静を発見しても、不如意の嘆きはまたたちまち頭を擡げ、彼女はそのことを思い詰めている自分を見出す。その時、「そんなつまらぬ者の心でも、どのような身の上になれば満足するのだろうか。どんな境遇になったところで、心というものは充たされないものだ」と解つていながら、とてもそうは諦めきれないものだ」と、みずから「思ひ知れども思ひ知られず」と猛り立つ思いであることを表白している。

どんな境遇であつても、心というものは何かしら不満があり、充たされることはないのだと自分自身が理解している。理解はしているのだが、悟りきってしまうことはできない。「心」に「身」がかなうことなどありえないと知りつつも、思い切れないでいるのである。

『紫式部集』『紫式部日記』の歌について、梅野きみ子氏は『白氏文集』の逆の発想を詠んだのだとし(11)、山本氏は独詠歌という性質から「紫式部は、ただ白詩を胸中において詠んだだけのことだ

った。」とし、「数ならぬ心」とは「白居易の心を念頭に入れ、それとの対比で言っているのではないか」とされる(12)。

『白氏文集』での「身」と「心」の詩群を知識として身につけていた可能性は否定できない。だがたとえ、この二首が「言わば紫式部が白詩との間に交わした会話(13)」として、白詩をふまえて詠まれたものであったとしても、その「身」と「心」への嘆きは伊勢などの女流歌人らと同じである。宮仕えの女性にとって「心」は「身」に背反しながら、「身」にとどまるしかなかった。その中で、ますます内省を深め、自己のあり方へと思いを寄せていったのかもしれない。

これらは「身」と「心」の二元性、二律背反性を捉えたものでありながら、それを自分自身に内省して詠まれたものであり、森本氏は「身」と「心」との対立相克をとらえて、自虐まで追いつめた二首である」と述べられている(14)。歌を詠む際に作者が見ているものは、境遇に苦しめられる心の嘆きではなく、現状を嘆きながら、それを受け入れて生活している自分自身のあり様である。それは宮仕えの生活を営む上で培われた孤独な独詠の構造であるといつてよいかもしれない。野村精一氏(15)はこれらの和歌表現での「身」と「心」が「それぞれが、あたかもひとりあるきする主体めいたもの」として、彼女の存在から抽出されて来ている趣きがある」とされ、

その「身」と「心」の関係構造の、彼女における特性は、いかなるものであったか。それは、古今以降のこの問題にふれた人々が、両者の乖離・背反を詠つても、ともあれその前提には、万葉びと以来の、本来「身」と「心」とは即時的に一体化しているものであつて、その離反したが、抒情の、あるいは悲しみの主題のモチーフとなつて対して、ここでは、そのような前提すら欠いている。

は「まだ修辭の域をでていなかった(17)」であろう。また、「身と心の対へのまなざしが概念として既に存在していたにもかかわらず、語対としてそういった成熟が生かされるに至らなかった、微妙な時代」と山本氏も指摘されている(18)。「身」と「心」が古今時代以降の要素を持たなかったのではなく、対表現として確立されていなかったため、どちらかが歌の主体を持つ場合には、同時には表わされなかったのであろう。

平安勅撰和歌集において詠まれる「身」と「心」の表現は男性歌人と女性歌人によって異なる表現の特色が見られる。『古今和歌集』では「身」と「心」を対比させた和歌は圧倒的に男性歌人に多い。なぜなら「身」に對比される「心」は思いの永続性、普遍性を誓う状況において使用されるからである。ところが、当時は心は消えるものとして詠むのが常識であつた(19)。心の移ろいが前提にあるからこそ、その不変を詠むのだろうか(20)。

東の方へまかりける人によみてつかはしける

伊香子淳行

思へども身をしわけねば目に見えぬ心を君にたぐへてぞやる

(離別・三七三)

「今はこれより帰りね」と実が言ひける折によみける

藤原兼茂

したはれて来にし心の身にしあれば帰るさまも道も知られず

(離別・三八九)

三七二番歌は相手を深く思っているけれども、身を二つに分けることもできないので、せめて心だけでも付き添わせようという発想で、こちらの「身」は身体的、社会的存在としての意味であろう。ここでの「身」と「心」の分離は物理的な距離であり、それらを「心」

「身」と「心」の乖離を嘆くのは、在るべきはずの「身」と「心」は分離することができないものだという意識があるからなのだが、作者はその前提を根本から諦めている。それを嘆きつつも、どこか境遇を受け入れてしまっている自分の心も存在しているという本来とは逆転した発想を和歌で表現しているのである。これは、宮仕えの生活に慣れてしまっている自分を「うとましき身のほど」と思う作者の心理と類似している。人間のあり様を表現してきた「身」と「心」は、このような自己を見失いがちな宮仕えの生活の中で、ますます奥深いものとして、捉えられていったのであろう。

二、「身」と「心」の表現

紫式部以前の和歌ではどのように詠まれていたのだろうか。『萬葉集』では「身」と「心」が詠まれた歌は三首あるが、小川靖彦氏はこれらの三首は「身」と「心」が並立しているものや、「心」が情念として肉体から遊離するものとして表現されており、対比という構造にはなっていないとされる(16)。だがこれは「身」と「心」という言葉の対比が表現として定着していないにすぎず、『萬葉集』では「身」という言葉では表わされないものの、「心」が外面に現れないものだと認識し、「心」のままにならないう行為を表現することによって、「身」と「心」の乖離として捉えられる。また同時に「身」は、「心」と対比されていないものの、「生理的な身体、運命的存在としての身、社会的存在としての身を複合重層させた、人間存在のあり様を根源的に捉えるかけがえのない言葉として鍛え上げられる」とされる。『萬葉集』の「身」は『古今和歌集』以降に表現される身体的な意味だけでない、複合的な要素を既に持っているのである。しかしながら、『萬葉集』の「身」と「心」との対比

は越えるものとする。形のない「心」を表現している。

三八九番歌は「心の身にしあれば」と、「身」と「心」は本来なら分離できるわけがないことをあえて強調しているのは、当時「身」と「心」の乖離を詠んだ趣向がよく認識されていたからではないだろうか。『古今和歌集』にはこれと類似された歌が多い。こちらは心情としての「心」が社会的存在である「身」を引き寄せている。「身」と「心」の対比はするように即物的に捉えられていたものであり、物理的、社会的障害を含んだ「身」から、相手を思う「心」を比喩的に表現されるにとどまっているのである。

「身」と「心」の乖離は漢詩文における隱逸思想からの発想と大曾根章介氏は指摘されている(21)。世俗的束縛から離れ、精神の自由を求める白楽天の思想は慶滋保胤らの当時の男性知識人に大きな影響を与えた。同じように、『白氏文集』に描かれる「身」と「心」の発想をいち早く和歌に取り入れたのも紀貫之、大江千里などの古今時代の男性歌人であつた。彼らは「身」の境遇から超越した「心」の存在を詠んでいる。

身は捨てつ心をだにもはふらさじつひにはいかなるぞ知る
おくかぜ
べく
(離別・一〇六四)

白雪のともにわが身はふりぬれど心は消えぬものにぞありけ
千さと
る
(離別・一〇六五)

「身」は捨てたり、古りてゆくが、それに対して「心をだにもはふらさじ」「心は消えぬものにぞありける」とし、「心」はその不変性を詠まれている。これは前述した「身」と「心」の乖離と、基本的には同じ要素を持っている。この場合の「身」は社会的境遇を表

わし、「心」は精神を示す。『白氏文集』に見られる「身」と「心」はこのようにその不調和に苦衷する認識ではなく、あくまで身の境遇から超越した精神の高さであった。

だがしかし、白楽天からもたらされたこのような「身」と「心」の関係は、やがて乖離した両者の不調和への苦悩へと注目されるようになった⁽²²⁾。例えば、『古今和歌集』では、

人をとはで久しうありける折にあひ、恨みければよめる

みつね

身を捨ててゆきやしにけむ思ふよりほかなる物は心なりけり

(雑下・九七七)

という歌があるが、この解釈に新編全集では「私の心が身を捨ててどこかへ行ってしまったのでしょうか。心というものは自分でも思いもかけない所に行ってしまうもので、私にだつてどうにもならなかったのです」とされている。詞書に見られるように、久しく会わなかった人に恨み言を言われたため、「心」がどこかに行ってしまったのだとはぐらかしたのであろう。また『全評釈』では「身」と「心」とその作用の「思ふ」とをそれぞれ別個として認識しているところに趣きがある」とされている⁽²³⁾。「身」を捨てて「心」がどこかへ行ってしまうという表現は、確固とした精神を表わす白楽天の「心」とは異なっている。また『貫之集』に見られる歌は「心」よりも「身」の方に重点が置かれて詠まれている⁽²⁴⁾。

あひ見んと思ふ心を命にて生ける我身のたのもしげなき

(五七一)

なげきこる山と我身は成ぬれば心のみこそいとなかりけれ

(六一八)

今はとてわが身時雨にふりぬれば言の葉さへに移るひにけり

(恋五・七八二)

女性歌人に「わが身」を詠んだ歌が多数あるのは、待つ女性達のその社会的境遇の不自由さを表しているが、一方で「身」は女性の人生そのものとして歌の中で表現されているのである。

秋山虔氏は小野小町の「わが身」の表現について「一貫してひとりの女の愛の不毛へのうらみなげきの哀切な表情がたたえられていることばとして実質をいだいている。そこには、ある人生を所有し経験した女のいのちがはりつめた内容となつているといえる。いいかえれば、小町の人生が歌の世界のことばにぬきさしならぬかたちと移封されているのであった」と述べられている⁽²⁶⁾。

「身」と「心」を対比させるように、自らの境遇を考えることはできなかった。したがって、女性には「わが身」こそが心であり境遇を表していた。「わが身」の移ろいやすさを詠んだ歌は女性歌人に多く、「心」と「身」は乖離することはなく互に関係しあったものだという意識がこの歌群からうかがえる。

これに対して、『後撰和歌集』では「身」と「心」の表現は女流歌人に占められるようになる。佐藤高明氏は『後撰和歌集』について『古今和歌集』とは異なった、別な目的と体裁を持った歌集であり、「物語創作の技倆を駆使した、いわゆる「歌集の物語化」的撰集」であるとされている⁽²⁷⁾。そのため、『後撰和歌集』ではほぼ全ての恋歌において詞書が附され、どのような状況下で詠まれたのかが分かり、複雑な歌への理解を助けているとも言える⁽²⁸⁾。

親のまもりける女を、否とも諾とも言ひ放てと申ければ

伊勢

否諾とも言ひ放たれず憂き物は身を心ともせぬ世なりけり

あつらへて忘るなと思ふ心あれば我身をわくるかたみなりけり

(七二七)

心をし君にとづめて年経れば帰る我身は物ならなくに

(八五一)

これらの歌は「身」と「心」が詠まれているものの、「身」の境遇への嘆きが歌の中心となつていているため、「心」は同じ比重を持つて使われていない。漢詩文の「身」と「心」の様相からは大きくかけ離れてしまつていふと言つてよいだろう。『白氏文集』から詠まれるようになった「身」と「心」の対表現は、ここではその独自性を表わしておらず、また以後の歌集からも徐々に減少していくのである。

三、女性歌人の「身」

次に女性歌人について見ていきたい。『古今和歌集』において、女性には「身」と「心」の対比された歌は見あたらない。近藤みゆき氏は女性歌では「我が身」が「こころ」よりも多く使用されている点を指摘されている⁽²⁹⁾。このことから、『古今和歌集』から以後における当時の女性歌人は「身」という語に深い関心と意味を持っていたことが理解される。

小野小町

みるめなきわが身をうらと知らねばや離れなで海人の足たゆくる

(恋三・六二三)

伊勢

夢にだに見ゆとは見えし朝な朝なわが面影にはづる身なれば

(恋四・六八一)

小野小町

(恋五・九三七)

「否とも諾とも言ひ放て」否でも諾だともいいから、はつきり言いなさいと言われたのに対して、どちらとも答えられなくつらいのは、「身を心ともせぬ世」我が身が我が心のままにできないという境遇であることだ。ここでの「身」と「心」は背反して、身動きの取れない状況を詠んでいる。

かしこまる事侍りて里に侍りけるを、忍びて曹司に参れりけるを、おほいまうちぎみの「なごか、音もせぬ」など怨み侍りければ

大輔

わが身にもあらぬわが身の悲しきに心もことに成りやしけん

(雑三・一一〇〇)

自分の身が自分のものでないような身の不自由さに、心も影響を受けて異なつてしまつたのであろうか。「身」の境遇によって、「心」もまた束縛されて自由にならない嘆きである。

昔おなじ所に宮仕へしける人、「年ごろいかにぞ」などとひおこせて侍りければ、つかはしける

伊勢

身ははやくなき物のごと成りにしをきえせぬ物は心なりけり

(雑三・一一二二)

「身」は無い物のようになつてしまつたが「心」は消えていないという内容は一見『古今和歌集』一〇六五番歌の歌と類似しているが、「なき物のごと成りにし」身とは、付随してくる境遇ばかりではなく、境遇に対する作者の精神を表わし、それが欠如されている

という表現として詠まれている。この場合の「心」は精神ではなく心情である。

これらの歌の「身」と「心」の乖離は、あたかも「心」が「身」に捉われているようである。野村氏はこれらの歌から、「身」と「心」の乖離が内面的に一般化されるようになり、やがて心身の分裂という認識の仕方の深まりを示すと指摘されている(29)。

伊勢のそれを含めて、それぞれ可成り長大な題詞を持ち、あるいは贈答の体をなしているところを見るに、それらのうたのこゝとばたちが支えていた広がり―言語空間といつていい―は想像するに足る。繁を忌うてそれらの詳細は尽くしえないが、そこには、おそらく宮仕えないしそれに近い生活環境下における男たちとの交渉の過程がよみ取られ、そこで引受けなければならない彼女たちの状況の重みが、「心」「身」―二元の分裂の認識を、このことばのかたちを引き出したものとおぼしい。

そこに詠われるのはもはや『古今和歌集』での「ふりゆく身」や「わが身」への嘆きなどというものではない。「身」と「心」という装飾を削ぎ落とした言葉から、ままたらない状況下で自己を見つめようとする切実な思いがある。境遇から自由な精神のあり方を表現していた「身」と「心」の対表現は、ここに至って自己に向けられ、「身」に捉われた「心」の嘆きを表すようになったのである。

「身」と「心」の対表現は男性歌人によって詠まれたもので、漢詩文の影響がある。だが当初の「身」と「心」の表現は即物的なものであり、その多くは「身」と「心」の乖離を物理的なものとして捉えられていた。また女性歌人はまだ「身」と「心」を詠んだものではなく、「わが身」を中心として自らを表現していた。なぜなら、

内面的には両者の隔たりはそれほど切実ではなかったからである。この二つの乖離を内面として一般化されたのは伊勢ら女性歌人の「身」と「心」である。『紫式部集』の歌二首もこの流れをくんでおり、これらの歌が発展していった過程には、宮廷生活での精神的束縛と抑圧があったことは指摘される通りである。

『紫式部集』には「心の鬼」という表現が見られる。

絵に、物の怪つきたる女のみにくきかた描きたる後に、鬼になりたるもとの妻を、小法師の縛りたるかた描きて、男は経読みて、物の怪責めたるところを見て
亡き人に託言はかけてわづらふもおのが心の鬼にやはあらぬ返し

ことわりや君が心の闇なれば鬼の影とはしるく見ゆらむ

絵に描かれている物の怪を小法師が退散させている場面を見て、男が亡き妻の物の怪に悩み苦しんでいるのも、自分の亡き妻への後悔する心が生み出した鬼ではなからうかと詠んだ。この歌は紫式部なりの感想なのかもしれないが、平安当時の人々がどれだけ「心」を把握していたかが理解される。

「身」と「心」は社会と個との関わりであり、社会の中で自分はどういうに在るのかという自己内省の結果として表わす言葉でもあった。道長との女郎花の贈答において「心からにや色の染むらむ」と道長が返したように、全ては「心」、つまり「身」を内在する自らの意識の持ちようであることを示している。

「身」と「心」の対比は当初、近くにいない相手に自らの思いを伝える表現手段であった。しかし一元的な心情だったものが、時代が経るにつれて、様々な思いが交錯し、結果として多面性を持つ精神としての「心」を受け入れざるをえない時代でもあった。『源氏

物語』での物の怪の描写も、全ては「心」の仕業であるという作者の冷静な視点が根底にあるからこそ、よりリアルに表現されているのかもしれない。

注

- (1) 新編日本古典文学全集『紫式部日記』小学館 平成七年
- (2) 和歌文学大系『賀茂保憲女集・赤染衛門集・清少納言集・紫式部集・藤三位集』明治書院 平成十二年
- (3) 森本元子氏「身」と「心」と―紫式部集の一主題―『武蔵野大学紀要』昭和五十八年三月
- (4) 堀川昇氏「紫式部集の歌二首―身にしたがつ心・身になはぬ心」『実践国文学』昭和六一年三月
- (5) 山本淳子氏「紫式部歌の白氏受容―「身」と「心」の連作をめぐって―」『国語国文』平成七年六月
- (6) 南波浩氏『紫式部集全評釈』笠間書院 昭和五十八年
- (7) 後藤祥子氏「紫式部集全歌評釈」『国文学』五十七年十月
- (8) 清水好子氏『紫式部』岩波書店 昭和五十二年
- (9) 山本氏注(5)論文
- (10) 清水氏注(8)書
- (11) 梅野きみ子氏『紫式部集』『紫式部日記』にみる「身」と「心」―白楽天に対比して―『王朝日記の新研究』上村悦子編 笠間書院 平成七年
- (12) 山本氏注(5)論文
- (13) 山本氏注(5)論文
- (14) 森本氏注(3)論文
- (15) 野村精一氏「身」と「心」との相克」『国文学』学燈社 昭和五三年七月
- (16) 小川靖彦氏「身」と「心」―万葉から古今へ―

- (17) 『国文学研究資料館紀要』平成五年三月
- (18) 野村氏注(15)論文
- (19) 山本氏注(5)論文
- (20) 山本氏注(5)論文
- (21) 新編日本古典文学全集『古今和歌集』小学館 平成七年
- (22) 大曾根章介氏「漢詩文にみる身と心」『国文学解釈と鑑賞』昭和六三年九月
- (23) 梅野氏注(11)論文
- (24) 『古今和歌集全評釈』右文書院 昭和五一年
- (25) 和歌文学大系『貫之集・躬恒集・友則集・忠岑集』明治書院 平成九年
- (26) 近藤みゆき氏「nグラム統計処理を用いた文字列分析による日本古典文学の研究」『千葉大学人文研究』平成十二年三月
- (27) 秋山虔氏『王朝女流文学の形成』塙書房 昭和六二年
- (28) 佐藤高明氏『後撰和歌集の研究』日本学術振興会 昭和四五年
- (29) 新日本古典文学大系『後撰和歌集』岩波書店 平成三年
- (30) 野村氏注(15)論文

(日本女子大学大学院博士後期課程一年)